

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化遺産を受け継ぐコミュニティのあたらしいかたち：機関研究：

「マテリアリティの人間学」領域 文化遺産の人類学：

グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ (2013～2015)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5771

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域

文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ (2013-2015)

問題の所在

文化遺産は、モダニティの進行とともにたち現われてきた概念である。多くの文化遺産は、過去との結びつきにその価値を置くため、モダニティとは無関係に思えるかもしれない。しかし、過去との結びつきを価値あるものと認識するためには、たゆまぬ変化を常態とするモダニティが進行していなければならないし、文化遺産を客体化しつつ歴史に照らして評価する科学的的精神も必要である。じっさい、文化遺産という概念が市民権を得ていくうえでは、20世紀のナショナリズムや多文化主義をふまえた文化行政が大きな原動力となった。

いっぽう、文化遺産には、過去から連綿と持続するものと

ための素地を解体しようとする面もある。そのことは、文化遺産の担い手の受け皿であるコミュニティ（担い手コミュニティ）をみればわかる。モダニティの一側面であるグローバル化が進展したことで、あるコミュニティは地理的に離散し、別のコミュニティは、アイデンティティを強めたため偏狭なナショナリズムにつけ込まれやすくなっている。こうした状況において、文化遺産（あるいは、広く考えて記憶やローカルリティ）をいかに継承していくかということは、いまや人類共通の課題といってよい。

この問題を解く鍵は、担い手コミュニティがグローバル化とどう向きあうかにかかっている。



ザンビアでは、祭りの創造と民族コミュニティの再活性化が進んでいる（1999年、吉田憲司撮影）。

いう側面もある。廃墟から発掘された遺物があらためて継承されようとする場合はもちろん、無形の文化遺産の場合も、担い手はそれを過去からの慣習に結びついたものとして伝えていることが多い。このため文化遺産は、モダニティの契機によって客体化されてはいるものの、それほど自由に操作したり変形したりはできない。担い手たちに結びつく先人たちの考えやふるまいを尊重しつつ、それを損なわないよう受け継がれるのが文化遺産といつてよいだろう。

そうした、いわば不易と流行のせめぎ合いのただなかにある文化遺産が、どのように受け継がれているのか。本研究をとらえてメンバーたちが答えようとする問いは、そのようにまとめることができよう。ここでいう文化遺産とは、有形のものも無形のものも含み、また、国家や国際機関に認定されないものも含む。

モダニティは、文化遺産が再発見されるためのさまざまな素地を整えた。だが、それと同時に、文化遺産を受け継ぐ

コミュニティとマテリアリティへの着目

世界遺産や国指定文化財など、一部の文化遺産は、国家その他の団体から補助金を得ることで、継承が容易になるかもしれない。しかし、補助金にもかぎりがあるだろうし、ローカルにおこなわれていた継承活動の一端を国家などが担うようになれば、文化遺産のありかた自体が担い手の意図から外れたものになるおそれがある。文化遺産がもともとはかぎられた人たちによって、その慣習に結びついたものとして担われていたと考えるなら、国家などによる援助は、手放して歓迎できない場合も多いだろう。こうした問題設定は、文化行政の内部には生じにくいし、それに深く関わる諸分野でもあまり意識されていない。人類学の分野で文化遺産をあつかううえでは、まずこのことを念頭に置いておきたい（岩本 2013）。

とはいえ、問題は、担い手コミュニティが独力で文化遺産を受け継げないということから始まっている。担い手コミュニティは、継承のありかたを自分でコントロールしつつも、外部の資金や協力にも頼りながら、継承をはたしていかざるをえないだろう。継承のための資源としては、上記のような文化行政による支援のほか、文化遺産の一部商品化や観光誘致、外部の非営利団体との結びつきなどがあげられよう。本研究でもこのことを念頭に、担い手コミュニティが外的資源とどのような関わりをもつかに着目しながら、議論を進めていく予定である。本研究の副題にある「グローバル・システム」とは、グローバル化によってアクセス可能になったこれら資源を動員する制度をまずもって想定している。

副題にみえるもうひとつの用語「マテリアリティ」は、グローバル・システムに対するコミュニティの側から発信を考えるうえで重要だ。①コミュニティの手元にとどめられる有形遺産だけでなく、②文化遺産に関わって商品化される工芸品・美術品や、③無形の文化遺産（儀礼や芸能）を物質化し

た写真や映像記録など、さまざまなモノがコミュニティとグローバル・システムを媒介している。①は直接的な媒介ではないが、外部からコミュニティにむけて人やモノを集め、人やモノのフローの求心力としてはたらくという意味で、やはりコミュニティと外部を媒介している。担い手コミュニティは、こうしたマテリアルな媒介をとおして、遺産継承に必要な資金を獲得し、その価値を外部に知らしめることになる。

モノを媒介として文化遺産の価値を認めるのは、コミュニティ外部の人びとだけではない。コミュニティ内部の後続世代、すなわち文化遺産の将来的な担い手も、モノをとおして文化遺産への理解を深める。次世代育成が文化遺産継承において重要であるのと同様に、それを媒介するモノも本研究の重要なテーマである。本研究はとくに、「博物館をもつ研究所」である国立民族学博物館でおこなわれるわけだから、モノに着目すれば、研究活動自体が文化遺産継承活動に転化する可能性がある。マテリアルな研究資料の共有を図る博物館は、文化遺産の継承にいかに関わっていけるのか。すなわち、博物館の潜在的役割はなにか。それを明らかにすることも、本研究の大きな目的である。

コミュニティが先か、文化遺産が先か

このような目的を掲げる本研究は、文化遺産を継承するためのノウハウについての研究にみえるかもしれない。たしかに、本研究にはそうした実践的側面があるし、具体的なノウハウが得られる可能性もあるが、それがすべてではない。なぜなら本研究があつかう事例は、担い手コミュニティの範囲や文化遺産の内容が自明なケースばかりでなく、まずそれを確定するところから始めなければならないことも多いからである。たとえば、コミュニティという受け皿が文化遺産を支えるのではなく、逆に現代では、文化遺産を核としてコミュニティがたち現れる場合も多いのではなかろうか。

文化遺産を継承する担い手がいてはじめて、継承すべき文化遺産も生まれてくるという考えかたは、ある意味では自然である。しかし、コミュニティのありかたがかならずしも自明でない現代では、逆に文化遺産やそれにまつわる記憶が先にあり、それを継承しようとする人たちがコミュニティとして集まることも考えられる。そのように「たち現れるコミュニティ」についての考察は、コミュニティをめぐる近年の文



エチオピアの文化遺産についての民族誌映画は、合衆国のエチオピアン・ディアスポラからもスクリーニングを受ける（2008年、川瀬慈撮影）。

化人類学的議論（たとえば平井 2012）に接合しうるのみならず、あたらしいタイプのコミュニティと記憶との関わりという未開拓領域をも議論の射程に収めることができる。

たとえば、東日本大震災で散り散りになってしまった村落では、しばしば、これまでにおこなってきた祭りや芸能をもとのかたちでとりおこなえなくなっている。そうしたなか、祭りや芸能の担い手の有志が集まり、避難先など地理的外部の支援を受けながら、場合によっては地理的外部で祭りや芸能を演じるなど、これまでとは異なる上演をつうじて継承がはたされるようになってきている（日高 2012）。こうした継承においては、オリジナルな担い手コミュニティに多くの支援者が参与し、あらたなコミュニティをつくりはじめたと言うことができる。このような「たち現れるコミュニティ」には、既存の地縁・血縁集団が文化遺産によって内部の関係性を再定義する例を一方の極とし、まったく見知らぬ者たちどうしで文化遺産継承が始まる例を他方の極として、さまざまなバリエーションが考えられよう。

2013年5月27日と28日に開く国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか？ アフリカの事例から」は、こうした記憶や文化遺産の「積極的な継承」によって、グローバル化の圧力のもとでコミュニティが活性化／再活性化される事例を討議する。この文章が刊行される頃には、その成果もはっきりしているはずだが、シンポジウムを半月後に控えた現時点では、それを書くことができない。来年度には報告したいと思っている。

【参考文献】

- 岩本通弥編 2013『世界遺産時代の民俗学—グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』風響社。
- 平井京之介編 2012『実践としてのコミュニティ—移動・国家・運動』京都大学学術出版会。
- 日高真吾編 2012『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』千里文化財団。



マダガスカルでは、生活のなかで伝えられたザフィマニリの木彫り技術がユネスコ無形文化遺産に指定されている（2012年、川瀬慈撮影）。

いいだたく

先端人類科学研究部・准教授。専門は生態人類学、視覚コミュニケーションの人類学。おもな著書に『海を生きる技術と知識の民族誌』（世界思想社 2008年）や『霧の森の叢智—マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』（責任編集 国立民族学博物館 2012年）、『マダガスカル地域文化の動態』（編著 国立民族学博物館 2011年）などがある。